

インフルエンザ予防接種予診票

任意接種用 (表面)

0.25
0才~2才

0.5
3才~

お子さんの場合には、健康状態をよく把握している保護者が、**太枠内**にご記入下さい。

1

2

患者様の個人情報は、法律に基づき保護され、予防接種目的以外への利用はないことを確認します。

住所	TEL ()			本日の体温	℃
ふりがな	男	生年	平成・昭和・西暦 年		
受ける人の氏名	女	月日	月	日生 (歳 ヶ月)	

ご記入の前に、裏面の説明と、別紙説明文をお読みください。

質問事項	回答	欄	医師記入欄
昨年度までに、インフルエンザ予防接種を合計2回以上受けましたか。	はい	いいえ	
今日のインフルエンザ予防接種は今シーズン何回目ですか。	1回目	2回目	
今日受ける予防接種について説明（裏面と別紙説明文）を読みましたか。	はい	いいえ	
最近1ヶ月以内に予防接種を受けましたか。	はい (受けた日:) (種類:)	いいえ	
今日、体に具合の悪いところがありますか。	ある (症状:)	ない	
現在、何かの病気で医師にかかっていますか。	はい (病名:) (服用中の薬:)	いいえ	
その病気の主治医には、今日の予防接種を受けてよいと言われましたか。 (はい・いいえ)			
最近1ヵ月以内に病気にかかりましたか。	はい (病名:)	いいえ	
今までに、(心臓血管系・腎臓・肝臓・血液疾患・免疫不全症・呼吸器系疾患・その他の病気)にかかり医師の診察を受けましたか。	はい (病名:)	いいえ	
今までにけいれん (ひきつけ) をおこしたことがありますか。	ある (最終は 年 月頃)	ない	
鶏卵または鶏肉を食べて発疹が出たり、下痢をしたことがありますか。	ある (いつ頃: 年 月頃) 1ヶ月以内に(食べた・食べていない)	ない	
今までに薬や食べ物で皮膚に発疹が出たり、具合が悪くなったことがありますか。	はい 薬・食品名:	いいえ	
今までに予防接種を受けて具合が悪くなったことがありますか。	ある (予防接種名:) (症状:)	ない	
《女性の方へ》妊娠中または妊娠の可能性はありますか。	はい (妊娠 週・未確定)	いいえ	
あらかじめ医師に伝えておきたいことがありましたら具体的にご記入下さい。(健康状態や質問など)			

医師の診察・説明を受け、予防接種の効果や目的、重篤な副反応の可能性などについて理解した上で接種を希望しますか

(希望します・希望しません) **保護者の署名(成人の場合は本人の署名)** 【 】

※医師の記入欄

医師のサイン

以上の問診及び診察の結果、今日の予防接種は (可能・見合わせる)

【 】

使用ワクチン:

lot.No.:

0.25 0.5

実施場所: (公社)京都保健会かどの三条こども診療所

医師名: 所長 尾崎 望

接種日: 年 月 日

※点線より外側を切り離してご利用ください。

インフルエンザワクチンの接種について

インフルエンザの予防接種を実施するに当たって、受けられる方の健康状態をよく把握する必要があります。そのため、表面の予診票に出来るだけ詳しくご記入ください。お子さんの場合には、健康状態をよく把握している保護者をご記入ください。

【ワクチンの効果と副反応】

予防接種により、インフルエンザの発病を阻止したり、インフルエンザによる合併症や死亡等を予防することが期待されます。

一方、副反応は一般的に軽微です。注射部位が赤くなる、腫れる、硬くなる、熱をもつ、痛くなる、しびれる、小水疱、蜂巣炎等がみられることがあります。過敏症として、発しん、じんましん、湿疹、紅斑、多形紅斑、そう痒、血管浮腫、精神神経系として、頭痛、一過性の意識消失、めまい、顔面神経麻痺等の麻痺、末端性ニューロパチー、失神・血管迷走神経反応、しびれ感、振戦、消化器として、嘔吐・嘔気、腹痛、下痢、食欲減退、筋・骨格系として、関節痛、筋肉痛、筋力低下があらわれることがあります(いずれも頻度不明)。その他に、発熱、悪寒、倦怠感、リンパ節腫脹、咳嗽、動悸、ぶどう膜炎があらわれることがあります。強い卵アレルギーのある方は、重篤な副反応を生じる可能性がありますので必ず医師に申し出てください。

非常にまれですが、次のような重篤な副反応が起こることがあります。(1)ショック、アナフィラキシー(じんましん、呼吸困難等)、(2)急性散在性脳脊髄炎(接種後数日から2週間以内の発熱、頭痛、けいれん、運動雌管、驚盤雌管等)、(3)脳炎・脳症、脊髄炎、視神経炎、(4)ギラン・バレー症候群(両手足のしびれ、歩行障害等)、(5)けいれん(熱性けいれんを含む)、(6)肝機能障害、黄疸、(7)喘息発作、(8)白血球減少性紫斑病、血小板減少、(9)血管炎(アレルギー性紫斑病、アレルギー性肉芽腫性血管炎、白血球破砕性血管炎等)、(10)間質性肺炎、(11)皮膚粘膜眼症候群(Stevens-Johnson 症候群)、(12)ネフローゼ症候群、このような症状が認められたり、疑われた場合は、すぐに医師に申し出てください。なお、健康被害(入院が必要な程度の疾病や障害等)が生じた場合については、健康被害を受けた人又は家族が独立行政法人医薬品医療機器総合機構法に基づいて救済手続きを行うことになります。

【予防接種を受けることができない人】

1. 明らかに発熱のある人(37.5℃以上の人)
2. 重篤な急性疾患にかかっていることが明らかな人
3. 過去にインフルエンザワクチンの接種を受けて、アナフィラキシーを起こしたことがある人
又は、過去にその他の原因でアナフィラキシーを起こした人は、接種を受ける前に医師にその旨を伝えて判断を仰いでください。
4. その他、医師が予防接種を受けることが不相当と判断した人

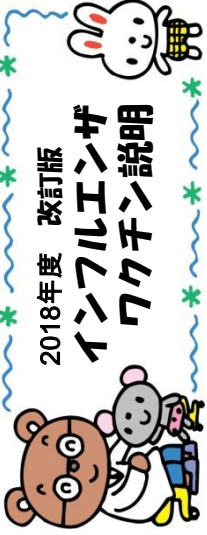
【予防接種を受けるに際し、医師とよく相談しなければならない人】

1. 心臓病、腎臓病、肝臓病や血液の病気等の人
2. 発育が遅く、医師、保健師の指導を受けている人
3. かぜ等の症状が出はじめたと思われる人
4. 予防接種を受けたときに、2日以内に発熱のみられた人及び発しん、じんましん等のアレルギーを疑う異常がみられた人
5. 薬の投与又は食事(鶏卵、鶏肉等)で皮膚に発しんがでたり、体に異常をきたしたことがある人
6. これまでにひきつけ(けいれん)を起こしたことがある人
7. 過去に本人や近親者で検査によって免疫状態の異常を指摘されたことがある人
8. 妊娠している人
9. 間質性肺炎、気管支喘息等の呼吸器系疾患のある人

【ワクチン接種後の注意】

1. インフルエンザワクチンの接種を受けたあと30分間は、急な副反応が起きることがあります。接種した医療機関に留まる等して、様子を観察し、医師とすぐに連絡がとれるようにしておきましょう。
2. 接種部位は清潔に保ちましょう。接種当日の入浴は差し支えありませんが、接種部位をこすことはやめましょう。
3. 接種当日はいつも通りの生活をしていただいてもかまいません。ただし、激しい運動は避けましょう。
4. 万一、接種後、接種局所の異常反応や体調の変化があらわれた場合は、速やかに医師の診察を受けてください。

別紙説明文



2018年度 改訂版 インフルエンザ ワクチン説明

今年も4価ワクチンです。
今年もAH3N2株とBビクトリア系統が変更となっています。

A型株	A/シンガポール/2015 (H1N1) pdm09 / A/シンガポール/2016 (H3N2)
B型株	B/プーケット/2013 (山形系統) B/メリーランド/2016 (ビクトリア系統)

接種回数には以下の通りです(←ポイント！)

2017年は2009年の新型インフルエンザ流行以降、大きな変異がみられなかったAH1N1株が変更されました。しかし2017・2018年の変更は、世界をめぐるインフルエンザウイルス株の大きな変異ではありません。
当院ではAAP (アメリカ小児科学会) の最新の推奨 (*) に従い、今年度も接種回数を以下の通りとします。

9歳以上の方 (大人も含む) は、1回のみ

8歳以下の方 (子ども) については

過去に接種した回数(年度問わず)が2回以上あるお子さん→1回のみ

過去の接種回数が0～1回のお子さん→今年度2回接種 (2週～4週間あける)

* Recommendations for Prevention and Control of Influenza in Children, 2018-2019

年長児や大人は効果大！

インフルエンザワクチンは、全くなかったことのない人に最初の免疫をつける効果は強くないため、こどもの場合は(特に乳幼児)効果が低いといえます。その一方で1回かかったことのある人の免疫を呼び覚ます効果(ブースター効果)は十分あるので、年長児や成人については、インフルエンザ予防効果が比較的期待できます。

予防が大事

インフルエンザにかかったとき、登園・登校の再開の目安は
“発熱から5日が過ぎ、かつ解熱後2日間(小学生以上の場合)
解熱後3日間(就学前乳幼児の場合)が経過していること”
タミフルや、イナビルなど抗ウイルス薬はあるけれど、やはりワクチンを接種して発症を防ぐのが一番です。

副作用に関して

接種部位の腫れなど局所反応の生じる頻度は約10%、発熱など全身反応の生じる頻度は1%以下です。また、成分によるアレルギー反応がまれに起こることがあります。インフルエンザワクチンは、予防接種法の定期接種ではない任意接種です。ワクチンによって健康被害が生じた場合は、独立行政法人医薬品医療機器総合機構法による被害救済の対象となります。

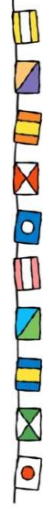
赤ちゃんを守るには？

生後6か月未満の赤ちゃんはワクチンを受けられません。

お父さんとお母さんがワクチンを受けることにより

赤ちゃんの感染のリスクを下げることができます。

この予防法をcocooningまゆわりといいます。



今年も10月15日(月)からインフルエンザワクチン接種を開始します。
ワクチンを接種してから効果が出るまでに2週間くらいかかると言われています。
流行前に十分に効果があらわれるように、11月末までには接種をしましょう。
抵抗力は少なくとも6ヶ月～1年続きます。